特定非営利活動法人
れんげ国際ボランティア会

みろくの風

Vol 75

自転車で保育園の送り迎えをする ウクライナからの避難民

-contents-

目次

- ウクライナ避難民支援事業『ありがとう』・・・2-3p
  本部事務局
- インド事業完了報告・・・・・・・・・・・・・・4-5p
  プロジェクトマネージャー　伊藤重剛
- ARTICのSDGs現在地・・・・・・・・・・・・・・6p
  本部事務局
- ARTICの目指す国際協力　・・・・・・・・・・・・7p
  本部事務局長　久家誠司
- 2022年ミャンマーでの活動　・・・・・・・・・・・8p
  ミャンマー事務所長　平野喜幸

れんげ国際ボランティア会

当会の活動は皆様からお寄せ頂く
募金に支えられています。

ウクライナ避難民支援事業

ありがとう

本部事務局

「ありがと～。」8月に玉東町に避難してそろそろ5カ月、もうすぐ3歳になるウクライナの子は、お見送りのときに「ありがとう。」と言ってくれます。

どうやら、別れるときの日本語は「さようなら」ではなく、「ありがとう」だと思っているようです。私達は玉東町に住むウクライナ避難民の方々の家を頻繁に訪問します。家具や電化製品の設置、就学・就労のための打ち合せ、体調不良の相談等々、訪問する理由は様々ですが、彼らはいつも私達にお茶やコーヒー、お菓子を出してくれます。そして毎回「来てくれてありがとう。」と言って、玄関までお見送りしてくれます。私達も玄関先で「ごちそうさま。ありがとう。」と言って家を出ます。

当会は2022年6月15日に熊本県玉名郡玉東町（ぎょくとうまち）と協定を結び、「オレンジネットワーク プロジェクト」（以降、ONP）を立ち上げ、ウクライナ避難民受け入れに係る一連の流れのサポートを行っています。

8月7日に1世帯目の到着以後、受け入れは順調に進み、12月の時点で4世帯13名が玉東町で避難生活を送られています。本年度中には追加で2世帯を受け入れる予定です。その13人のうち6人が子供で、そのうち3人は地元の小学校に通い始めました。ある日、小学校から「ウクライナの子たちと日本の子たちのコミュニケーションを促進するため、小学生用の指差し会話帳を作って欲しい」と要望がありました。指差し会話帳とは、外国からの訪問者が外国語と日本語が対になった会話文を指さしながら意思の疎通を図るためのものです。

裏面

小学生向け指差し会話帳

指差し会話帳を作るに当たり、まずは日本の生徒たちがどんなフレーズが欲しいのかを先生を通じ聞いてみました。すると、出てきたのはウクライナから来た転校生たちへの思いやりのあふれる日本語ばかりでした。

「また明日ね」「一緒に行こう」「一緒に遊ぼう」「仲良くしよう」「上手だね」「すごいね」「楽しみだね」「がんばれ」「一緒に頑張ろう」「大丈夫？」「困ってない？」「手伝うよ」等々、相手を気遣う暖かい言葉に感銘を覚えました。

小学校に編入前、周りの大人たちは、子どもたちがまだろくに日本語が話せないままで、小学校で本当にうまくやっていけるのだろうか？ととても心配していました。「子供たちは適応能力が高いから大丈夫ですよ。」と励ます立場にいた私たちも実は内心、祈るような気持ちでいました。しかし、日本の小学生たちから出たこれらの言葉を見たときに、「きっとこの学校での受け入れはうまくいく。私達も頑張ろう。」と逆に私たちが勇気付けられました。

指差し会話帳を使って話しかける児童たち

優しさの和が広がってるのは子どもたちの間だけではありません。いま玉東町の商店や病院には大人用の指差し会話帳（8月頃に作成し、町の全世帯に配布）を常備してくださっているお店が多くあります。また、「私も携帯電話にウクライナ語の翻訳アプリをダウンロードしたよ！」と言ってくれる方も多くいらっしゃいます。さらに「このみかん、ウクライナの方にどうぞ。」と言って役場に果物や野菜を届けて下さる方もいらっしゃいます。

私たちARTICはこれまで、スリランカ、カンボジア、タイ、ミャンマー、インドと、東南アジアにおいて避難民、難民の支援を20年以上続けてきており、その分野に関してはそれなりのエキスパートであると自負しております。しかし、欧州から日本への避難民の支援を行うのは実はこれが初めての経験です。正直なところ人一倍の不安を抱えつつ、日々試行錯誤を重ねながら、そして時には失敗から学びつつ、少しづつ前進しております。

避難民の方々にとっても、きっとこの先、まだまだ多くの乗り越えなければならない厳しい壁があるでしょう。戦禍で負ったトラウマとの戦い、友人や家族への尽きぬ想い、家や職を失った喪失感の克服、自国とは大きく異なる日本の文化や習慣への適応、欧州の言語と文法のまったく違う日本語の習得等々、簡単なことではありません。しかし、大人から子供まで、玉東町のあらゆる方々から、そして全国のARTIC会員の方々からの暖かいサポートを頂き、きっと彼らはこの苦難を乗り越えられるに違いないという確信が芽生えてきました。

ところで、最初に到着した家族の夫妻はどちらも玉名市で就職が決まり、男性の方は11月から既に働き始めています。自立のためにはある意味で就労が最難関で、隣国のポーランドに避難した方々の多くが半年以上たっても、現地で就職ができないまま、シェルターで悶々とされているということです。しかし、この夫妻のどちらもが日本到着から3~4カ月で就労できたのは本当に幸運でした。事情をご理解下さり、日本語のハンディもある中、職場を提供してくださった経営者の方々の勇気と心意気に深く感銘いたしました。

最後になりましたが、このウクライナ避難民受け入れプロジェクトは、素晴らしい支援体制を敷いて献身的なサポートを行われている玉東町役場の皆様だけではなく、学校、職場、そしてご近所の皆様のコミュニティ精神、それを資金面でバックアップしてくださる日本財団の皆様、そしていつも私どもARTICを信頼して心温かいサポートを下さる会員の皆様のおかげでここまでやってこれました。皆様への「ありがとう!」の気持ちはどんなに言葉を並べても伝えきれません。これからも努力を重ねながら精一杯取り組んでまいりますので、引き続き温かいご支援の程、どうぞよろしくお願い致します。

2組目の家族の空港お出迎え

玉東町主催の国際交流会に参加

ご近所さんから味噌汁づくりを習う様子

速華院誕生寺の奥之院大祭の見学

地元小学校への入学式

地元住民とのバーベキュー

玉東町主催の国際交流会で故郷の味
ボルシチを参加者に振る舞う

長洲町主催カッター大会出場

避難民初の就労実現

政府助成金 チベット上下水道事業、無地終了す

プロジェクトマネージャー　伊藤重剛

チベット支援の発端

チベットはヒマラヤ山脈の北側に広がる高原で、仏教（密教）が生活の中心の国でした。しかし現在のロシアによるウクライナ侵略と同様に、1950年に突然中国人民解放軍に侵略され、軍隊らしい軍隊をもたなかったチベットは簡単に占領され中国領となったのです。ダライラマ法王はじめ多くのチベット人が険しいヒマラヤ山脈を超えてインドに逃げ、現在約10万人のチベット人がインドで難民として暮らしています。

ＡＲＴＩＣでは、インド国内の難民居留地に分散して住んでいるチベット人を25年以上支援してきました。1997年に建立された蓮華院の五重塔の一層に、日本の真言宗と同じく密教を信仰するチベットの僧侶に、曼荼羅などの仏画を描いてもらったのをきっかけに、支援活動を始めました。

過去の実績が評価される

日本の国会には、「チベット問題を考える議員連盟」という100人強の超党派議員によるグループがあり、チベットに対しての支援を推進しています。この会に対してチベット亡命政府前首相のロブサン・センゲ氏を中心にチベット亡命者への支援要請がありました。

今回の私たちのチベット支援は、この議員連盟からＡＲＴＩＣへの依頼で始まりました。ＡＲＴＩＣはこれまで教育支援を中心に、住宅補修や出版助成など25年間、継続的にチベット支援を続けてきました。その過去の実績によって、今回の依頼に繋がりました。

インドの水不足

インドは全国的な水不足が大きな問題になっています。日本ではどこでも水道の蛇口を捻りさえすれば安全な水が充分得られます。しかしインドでは蛇口からいつも水が出るのは普通ではなく、たとえデリーのような大都市でさえ時間給水が当たり前なのです。

もちろんチベット難民のインドでの住居地（以後居留地）でも同じで、例えば険しい山間部の居留地のカムラオでは、通常の季節でも1日の給水時間は朝夕それぞれ30分。夏の水不足時期はさらに厳しく、近くの水場に給水車で買いに行く状態で、1日1人の給水量は5リットルというとても困難な状況でした。水不足に陥ると炊事洗濯が難しくなり、トイレが流せず、衛生環境は悪化し、長期化すると様々な形で健康被害が出るのです。

事業地の地図

外務省資金による支援

以上の事情から日本政府（外務省）から助成金を頂いて、インド北部ヒマラヤ南端のヒマチャルプラデシュ州の8つのチベット人難民居留地で、水・衛生関係について、支援事業を行なうことになりました。期間は2020年4月から1年間で、主な内容は以下の通りです。

①水道管の敷設

②貯水槽の建設・設置

③排水路・道路側溝の設置

④公衆トイレの改修と建設

ところが事業が始まるのとほぼ同時に世界的な新型コロナの感染が始まり、インドでも全土で数カ月間の都市封鎖がありました。そしてそれが解除された途端、全国に蔓延したのです。そのため事業開始後半年は仕事ができませんでした。その後各地で事業を再開しましたが、予定より8か月遅れの2021年末にやっと事業の大半が終了したのです。

ところが一難去ってまた一難。高架水槽建設と井戸掘りを予定していたビールという難民居留地で、井戸掘りの許可が州政府から下りず、8カ月さらに待たされることになったのです。現在地下水が不足しているインドでは、その許可を取るのがとても難しいのです。このような

状況で、大幅に遅れましたが、ようやく2022年9月に、予定より1年半遅れで全ての事業が終了しました。

住民の喜び

事業地ビール・デゲで、ある高齢の婦人が寄ってこられ、私の手を取って「有難う。おかげで本当に助かりました。」と涙を流さんばかりにお礼を言われました。一人暮らしのこの婦人は、自宅へ引かれた古い水道管が壊れて水が出ず、いつも隣家から「もらい水」の生活でした。一人なので使用量は多くはないけれど、仮に10リットル運ぶにしても10キロの水は、高齢婦人にとっては重く、毎日難渋しておられました。この事業で新しい水道管が敷かれ、自宅の台所の蛇口から水が出るようになったので、とても喜んでおられたのです。

先のカムラオでは、1人1日の給水量が5リットルだったのが、20リットルになりました。こんなことがあちこちの居留地でありました。プロジェクトが完成して、住民の方々が喜ぶ姿に接するのは、担当した者にとって最大の喜びです。これで苦労が報いられ、やり甲斐を感じるので、またやろうという気にもなるのです。

慈悲の実践としての活動

私は建築を専門とする大学の研究者でしたが、定年退職後、僧侶になりました。同じタイミングで、建築案件ということでＡＲＴＩＣから要請を受け、本事業に参加し、有難いことに直接の事業担当者として計画の立案から実行まで行ないました。

ＡＲＴＩＣの母体は蓮華院誕生寺ですので、行なう事業は仏教精神の慈悲の心に則った仕事ともいえます。基になる資金は会員の方々の浄財なのです。私は蓮華院の一員として衆生済度（生きとし生けるものの苦しみを救う）のお手伝いのつもりで参加しました。

事業がほぼ終了した一昨年11月のことです。インドのコロナもやや治まった頃、工事現場の最終確認のために各居留地を回りました。このとき施設の引き渡し式をチベットの僧侶たちと共に行ないました。洒水加持で場所を浄め、お祈りを行ない、各施設が故障なく末永く使用され、人々を救ってくれるよう仏様に祈りました。チベット人の仏教は蓮華院と同じ密教なので、チベット僧の所作や法具こそ少し違いますが、洒水して読経という同じやり方だったのには親近感を感じました。

引き渡し式にはもちろん住民の方々も参加してくださり、完成した施設をこれから大事に使っていこう、という誓いを示してくださいました。

最後に

初めて経験することも多かったため、予期せぬ障害、期間の延長など、苦労はありましたが、無事全事業(8ヶ所)が終わったことを嬉しく思います。必ずうまくいくという信念で仕事に当たってきました。インドにおけるパートナーであるＣＵＲＥ(現地ＮＧＯ)や日本で支えてくれたスタッフには深く感謝する次第です。

期間延長で予算が約1割超過した分は、会員の皆様の浄財からなるＡＲＴＩＣの自己資金で賄いました。会員の皆様には甚深の御礼を申し上げますとともに、ＡＲＴＩＣの活動にご理解をいただき、今後もますますのご支援をお願い申し上げます。

ARTICのSDGs 現在位置（その1）

本部事務局

昨今、新聞やテレビなど日本中でSDGs（エス・ディー・ジーズ）を多く耳にするようになりました。持続可能な開発目標（SDGs）を通して、2030年までに世界の貧困を終わらせ、「誰一人取り残さない」持続可能な世界の実現を目指すための様々な取り組みが世界中で行われています。本号では、当会の取り組みをSDGsの視点からご紹介いたします。

活動例① ミャンマー 図書館活動

ターゲット目標

技術研修や教育への機会を向上させ、貧困の連鎖防止

学校校舎の建設や図書館の建設、教員への教育研修

ミャンマーでは慢性的な教員不足や、貧困が原因となり、子どもたちが質の高い教育を受けることがとても難しい状況が続いています。そしてさらに、新型コロナウイルス感染拡大、国内政変と次々に困難が続き、学校は2年近くも閉鎖されるなど、教育への希望の灯は消えかかっていました。

実際に私が村を訪問した際にも子どもたちからは「学校に行きたい」「勉強がしたい」といった切実な声が多く聞かれました。

一方で、当会が行ってきた研修に参加された教員の方々の多くも、困難に負けることなく対策を考え、実践することの重要性を研修を通して、十分に理解されています。彼らは、学校や村が閉鎖的で後ろ向きになっている状況の中でも精力的に活動を続けました。

ミョウハウン校の教員は、学校が閉鎖されている間、移動図書館や図書委員会を運営し、遠方に住む生徒にも本が届く仕組みを作りました。地域で図書館活動が消極的になっていると感じた彼は、地域の教員を呼び集め、絵本を配り、読書感想文や絵を書くことを促す「絵本プロジェクト」をARTICと共同で行いました。このような高い志を持った先生のおかげで、子どもたちは本を読み、勉強を続けることができたのです。これこそが当会の目指す「自立のための援助」が結実した具体例だと言えるでしょう。

一人でも多くの子供たちが、質の高い教育を受けることができるように、引き続き活動を続けて参ります。

当会支援の図書館

地域の学校の教員に活動を呼びかける当会研修卒業生

活動例② インド 安全な水と衛生支援

ターゲット目標

上下水道の建設や、トイレ建設、飲料水設備建設

水槽・上下水道設置（カムラオ）

健康的な生活を送るためには、安心して飲める清らかな水が必要不可欠です。日本では安全な水道水、下水道も完備されており、水に関して、日常生活に困ることはほとんどありません。しかしチベット難民の暮らすインド北部の山間部では、インフラ整備が遅れており、安全な水を得ることが困難な場所も多々あります。そのような地域では、特に冷え込みの激しい冬季に水源まで水を汲みに行くために多くの体力と時間が消費されます。高齢化が進むチベット難民居留地では、高齢者が遠くの場所から水を運ぶことを強いられており、常に危険が伴います。そのような現状を受けて、当会は現地の団体と連携し、上下水道設備や貯水タンクを計8カ所の村落に設置しました。それらの地域の高齢者の方々から「水くみの苦労が無くなって、とても楽になった」と感謝の言葉をいただきました。

近年におけるインドの経済発展は目覚ましく、都市部の近代化や富裕層の生活には目を見張るものがあります。しかし、一歩都市部を出ると、平均的なインド人の暮らしはまだまだ多くの困難を抱えています。チベット人居留区へは更に国の支援が届きにくいのが現状です。このような場所に支援を届けることこそが、当会の役目であり、皆様からのご協力のもと、引き続きSDGsの大目標でもある『誰一人取り残さない社会』実現のため邁進してまいります。

ARTICの目指す国際協力

本部事務局長　久家誠司

「情けは人の為ならず」。近年この言葉を「人に情けを掛けると、本人のためにならない」と解釈している人が50％近くいるそうです。もちろん皆さんは本来の意味をご存知のことと思います。そして、この言葉にはさらに「下の句」が有ります。それは「巡り巡りて己が（身の）為」というものです。「人に親切にしておけば、いつか良い報いが自分に返ってくるよ」という意味です。

さて、日本は戦後間もなく世界で難儀をする途上国の為に経済開発援助を開始致しました（アジア太平洋地域の途上国援助を目的とした国際機関「コロンボプラン」に1955年加盟）。敗戦から僅か10年で支援国としてアジアを中心に援助を行った結果、多くの国々が親日となり国際社会の中で日本の味方となってくれました（貿易や協定、国際交流など）。近年では、東日本大震災の際に何と190もの国や地域、国際機関が援助の手を差し伸べてくれました。人への施しはまさに自分自身への施しとなるということです。もちろん日本も先の大戦後、様々な国々からの支援により多くの命が救われたことを忘れてはなりません（詳しくはみろく68号にて）。

上記の支援はODA（政府開発援助）レベルのお話ですが、民間の各種支援も1980年前後から活発になってきました。当会も1980年に設立され、以後42年間様々な国や地域にNGO（主に民間の国際協力団体を指す）として各種支援を続けてまいりました。ODAと比べれば規模は異なりますが、公的福祉から漏れた人々や被差別の状況にある人々、思わぬ事変や災害に合い危機的状況にある人々、などに対して支援を行ってきました。

私達を含めてNGOにとって活動を開始した初期の頃の支援は今にして思えば稚拙なものだったように思います。「助けたい」という動機や思いが先行し、現地のニーズを十分に調査・把握することなしに行われた支援は、その時は喜ばれたとしてもかえって自立を阻害したかもしれません。今日ではその反省の上に立って、途上国が抱える課題解決のために、技術や手法を有する先進国側の組織が、教育や訓練を通して、途上国側の組織にそれを伝達する技術移転型の開発が多く見受けられるようになりました。近年多用される【ワークショップ】などもその一つです。

カンボジア難民支援物資

さらに現代の支援で重要とされるのが現地住民達の参加です。支援する側が押し付けるのではなく、現地の弱い立場にある人々の意識や意見を尊重し、決定のプロセスに参加できるようなシステムでなければいけません。

このように私達ARTICは考えやり方も進化(深化)させながら、今後もさらにより良い支援を行っていく所存です。会員の皆様の末永いご理解とご協力をお願い申し上げます。

街頭募金の様子

難民救済に愛の手

カンボジアへ送る

熊日「地域ニュース」の

設立当時の活動に関する新聞記事

2022年 ミャンマーでの活動

ミャンマー事務所長　平野喜幸

1 今年度の成果

2022年は政治をめぐる厳しい環境下、計7校の学校建設を行いました。また、それぞれの学校では、田んぼを購入し、稲作プロジェクトや図書館の運営等、各村の状況に合った開発プロジェクトを実施しております。2021年2月のクーデター以降、プロジェクトの実施には並々ならぬ困難が強いられています。そのような状況の中でプロジェクトを中断することなく、7校の学校建設が無事に終了したことは、皆様からの暖かい心の支えがあったからこそと、心より感謝申し上げます。

2 図書館活動

過去に建設した図書館が15館ありますが、それらの学校に呼びかけて昨年6月から11月までの半年間の日程で図書館活動コンクールを行いました。毎月のモニタリング時には、生徒が読んだ本の数、地域住民からの寄付の額、毎月の新規図書の購入数、各学校での図書館関連の事業など、各方面から点数を付けて、できるだけ客観的に評価しました。生徒もモニタリング時には、自分が読んだ本の感想を発表してくれたり、それを自分の人生にどう役に立てるかなどを言えるようになり、徐々に本を読む習慣が根付いてきているように感じます。

また、パナソニック様の協力で出版した「松下幸之助物語」の作文コンクールもコロナ禍やクーデターの影響で2年遅れてしまいましたが、昨年4月から各タウンシップ(日本の郡にあたる)に本を配布し、7～9年生（日本の中学生相当）に読書感想文を書いてもらいました。全部で180通もの作文が寄せられました。実は各学校やタウンシップの教育事務所で「一次選考」が行われておりますので、イラワジ管区全体では、2，000名以上の生徒がこのコンクールに参加しました。12月10日には、図書館活動コンクールとともに人材育成研修センターで表彰式を開催しました。

3 その他の活動

前述の「松下幸之助物語」感想文コンクールと共に同社から144台のソーラーストレージの寄贈を受け2020年に建設したベーネークイン準高校のある村で家庭電化プロジェクト、並びにこれから2年間毎月電気料を集め、その資金を元に図書館建設を計画しています。家族での団らんや子供達の夜間の家庭学習に太陽光発電の明かりが役に立つと共に、村人の参加で2年後の図書館建設を目指します。

4 今年度建設した学校の紹介

①ユワテッポン中学校（ガブドー・タウンシップ）
生徒数：159人
建設開始日：2021年11月16日
建設完了日：2022年4月18日
引き渡し日：2022年4月20日（落成式）
開発事業：田んぼ購入・稲作プロジェクト及び図書館活動

②スィークワ（準）高校（イェージー・タウンシップ）
生徒数：243人
建設開始日：2021年12月10日
建設完了日：2022年3月25日
引き渡し日：2022年5月8日（落成式）
開発事業：田んぼ購入・稲作プロジェクト

5 各校での開発プロジェクト

①ユワテッポン中学校 稲作及び独自で図書館活動

収穫を迎えた学校前の田んぼ

建設後に空いた教室を図書室に改造した図書館活動

②スィークワ稲作プロジェクト

購入した約6エーカーの田んぼ